KEIO UNIVERSITY ART CENTER NEWSLETTER

ARTLET

52

上・下：©フランス映画祭／ Unifrance

慶應義塾大学アート・センター ARTLET　第52号

FEATURE ARTICLES

映画祭からうまれるもの

映画祭の「いま」を知る
杉原　賢彦

「音楽やるなら慶應行こう！」プロジェクト
藤堂　誠

映画×教育＝映画祭？　教養教育としての映画教育について
山口　祐子

TOPICS

活躍する先輩『バスケから囃子方へ』
中島　一樹

INFORMATION

活動報告

映画祭からうまれるもの

ますます多くの情報が流通する今日、「フェスティバル」は今日の芸術メディアの中でも重要なものになりつつある。氾濫する発信の中で、どのような作品が現代をより鮮やかに表現しているのか、人々が対峙するべき問題を提示しているのはどれなのか、音楽であれ、造形芸術であれ、「フェス」の果たす役割は大きい。それは映画においても特にそうであり、世界各地で「映画祭」が開催され、世界各地からやってくる。慶應義塾の研究・教育もそういったものと無縁ではない。本小特集では、映画および映画祭と本学の関わり合いをいくつか紹介したい。

©フランス映画祭／ Unifrance

映画祭の「いま」を知る

杉原　賢彦
（映画批評／目白大学准教授）
TEXT: SUGIHARA, Katsuhiko

世界中にどれほどの映画祭があるのか、その数を数えることほどムダなことはないかもしれない。たとえば東京都内に限ってすら、数十どころか、数え方によっては数百を挙げることができるのだから。

では、それらの映画祭はいったいなんのために存在しているのか？ そこから見てゆくと、いくつかその性格と目的が明らかになってくるかもしれない。

だがその前に、みなさんがご存じな映画祭にはどんなものがあるのだろうか？

メディアを華々しくにぎわせるのは、カンヌ映画祭やヴェネツィア映画祭などの国際映画祭だ。毎年、10月下旬に開催される東京国際映画祭も、こうした国際映画祭の枠組みに属し、そこでは世界中から招待された映画とその監督・俳優たちが、グランプリを目指して競い合う。

その一方で、その地方・地域ならではの特色を生かした小さな映画祭も存在する。小津安二郎監督を記念して、別荘があった蓼科で晩夏に開催される「小津安二郎記念・蓼科高原映画祭」や、日本映画の発祥地である調布市で開催される「映画のまち調布シネマフェスティバル」などのほか、ぼく自身も「京都国際インディーズ映画祭」という、京都市の歴史遺産にもなっている能楽堂を舞台にしての1日かぎりの映画祭の顧問と審査委員長を仰せつかってもう数年になる。

これらの映画祭には、前述した国際映画祭とはまったく異なった意図が隠されている。地元地域の発展と知名度アップのためのブランディングや、あるいは人と人との交流を図るという目的だ。

つまり映画祭には、その背景にさまざまな設立意図と、それに合わせた方策が伏在しており、それを読み解くことによって、なぜそれらの作品が選ばれているのか、主催者たちの思いや、さらには映画の未来をも、遥かに見やることができるのだ。

とまれ、まずは映画祭の意図と目的というところから、映画祭とその目的を見てみよう。

映画は国家戦略だ

もっとも古くからある映画祭は、毎夏にイタリアで開かれるヴェネツィア映画祭だ。1932年8月に初回が開催され、2019年で76回目を迎えた（途中中断があるためかんたんな引き算とはならない）。1950年代、日本映画が次々とこのヴェネツィア映画祭で受賞を果たし、日本映画のみならず、戦後日本そのものの復活を強く世界に印象づけた映画祭でもある。だが、この映画祭設立の裏側には、イタリアを映画によって知らしめるという目的があった。当時のムッソリーニ政権は、観光地としてのヴェネツィア・リド島を世界に向けアピールするという意図のもと、開催。スターが集い、まだ見ぬ映画が次々上映される祝祭空間は、またたく間に人気を呼び、最終的に2万5000人余の観客を呼び込むことに成功したという。集ったスターたちも、グレタ・ガルボ、クラーク・ゲイブル、ノーマ・シアラー、ジェイムズ・キャグニー、ジョーン・クロフォードと、まさに当時のハリウッド・スターたちのそろい踏み（のちにイタリア映画界を支えることになるヴィットリオ・デ=シーカもそのなかに混じっていたそうだ）。華やかなリゾート地をいっそう華やかに飾るに、映画祭ほどふさわしいものはないということを証明したのだった。

「映画とアメリカは同義語である」と言ったのはフランスの映画批評家セルジュ・ダネーだが、その言葉を敷衍すれば、映画は国家を表象する可能性を持つということでもある。イタリアは映画によって国家戦略の先手を打ったわけであり、これはのちにナチス・ドイツが同手段を採用するきっかけともなった。

やがてフランスもまた、1930年代後半にヴェネツィアより以上の映画祭を企図する。しかし、折悪く始まった第二次世界大戦になし崩し的に敗北してしまったことにより、カンヌ映画祭は1946年まで持ち越しとなってしまい、それがため、新たな性格づけを必要とすることになる。

©フランス映画祭／Unifrance

©フランス映画祭／Unifrance

映画はショーウィンドーだ

映画が国家を先導するものである一方、それはれっきとした（文化的）商品でもある。多額の製作資金をかけてつくられた映画は、その資金をいかにして回収（リクーブ）するかで、つねに頭を悩ますことになるのだ。第二次世界大戦後の映画界は、テレビの出現に脅かされながら、その商品価値をどのようにして見せるかに苦心する。その最大関門を開いたのが、カンヌ映画祭だった。

ヴェネツィアの後塵を拝したカンヌ映画祭は、当初、観客動員という面でも、また観光誘致への貢献という面でも引き離されていた。そうしたなかで1950年代後半に模索されたのが、マーケット部門の付設だった。

すでにフランスは、ナポレオン時代以来の政策戦略として、美術界を対象として画家の育成からその市場の開拓をも行ってきた。育成から市場開発までを国家戦略的に推進したのだ。これを映画に拡大したものが、フィルム・マーケットになると言ってもよいだろう。つまり、映画を上映すると同時に、その企画や脚本への投資を募る市場を設けることによって、資金流通の合理化を図ったわけでもある。実際の最新映画がショーウィンドーとして映画祭空間に並べられるととも、新たな商品価値の可能性を見つけるための場を提供したのだ。

映画祭に集った監督やスターたちは、映画祭の華であると同時に、将来的な商品の具材となりうる。そしてそこに集う批評家や観客たちは、味見してそれらの価値を伝える、いまで言うインフルエンサーとして迎えられているわけでもあるのだ。

実際、今日の映画祭において、大部を占めるのは、このショーウィンドー型映画祭と、そして次に述べる地域振興を目的としたものと言えるだろう。

映画は地域を掘り起こす

映画を見ていると、ときおり見知った場所に出会って我にもなくうれしくなってしまうことがある。あるいはまた、心をつかまれてしまった映画のなかの空間に、自身、身を置いてみたいと思ったことは誰にでもあることだろう。

聖地巡礼とも呼ばれるようになったそうした思いは、観光誘致のみならず地域振興と地元活性化へとつながるヒントをもたらした。そう、映画には、ありきたりな場所を、思いもよらぬなにか特別な地に変えてしまう魔法があるのだ。人を呼び集め、交わりを創出するための場づくりに、近年の映画祭は一役買ってきた。同じ空間で同じ時間を過ごす映画は、共通の感動体験を得られるがゆえに、人々を結びつける力を強く持つ。

長野県の茅野市で毎年開催される「小津安二郎記念・蓼科高原映画祭」は、小津監督作品の記憶とともに、いまも残る彼の別荘「無名荘」や、小津映画ゆかりの俳優、脚本家たちの別荘や散策の小径をたどり直すという魅力を背景にして、蕎麦や日本酒や地元の幸を、涼やかな高原の空気とともに味わう、そんな楽しみを与えてくれ、毎年、晩夏のころになると、いそいそと旅の準備へ誘う。映画を見ることより以上に、映画祭が開催される場に集い、そこで出会い、触れあう人たちとの共有体験こそ無上の歓びとなる。映画祭の新たな楽しみ方が、20世紀も後半になって生まれたのだった。

映画祭と春夏秋冬を過ごす

そしていま、1月から12月まで、ぼくは映画祭とともに過ごす。試写室で映画を見るのと同じくらい、映画祭で映画を楽しみ、人と出会う。そこでしか出会うことができない人々がいるから。

観客として、批評家として、あるいは関係者として。それぞれの楽しみを見つけ、満喫しながら、あるいは評言するための言葉を探しながら。

だが、現在、映画祭はさまざまな意味で岐路に立たされている。それは、映画そのものが変わりつつあることと無関係ではいられないからでもある。フィルムからディジタルへ、映画館からネット配信へと、そのメインストリームが変化しつつあるいま現在、映画祭もまた、現実の場所から仮想の空間へと場所を移しつつあるのかもしれない。

そのなによりの証左が、フランス映画の普及を図るユニフランスが採っている戦略に見つけることができるのではないかと思う。

ユニフランスは、前述したカンヌ映画祭を主催すると同時に、世界各国において自国映画を紹介する（ミニ・）ショーウィンドー型映画祭「フランス映画祭」を開催し、さらにウェブ時代を見すえて2011年よりインターネット上の映画祭「my French Film Festival」を開いている。その戦略として見えてくるのは、映画のみならず映画祭の多様性を模索する仕掛けとそこからのフィードバックをいかに得るのかということだ。とりわけ、フランス映画のショーウィンドーとして機能させているフランス映画祭と、変化しつつある映画とその観客をダイレクトに看取するmy French Film Festivalには、新時代の映画ニーズをいかにつかむかという課題に加えて、いかに新たな観客を育てるかという課題に対する戦略を読み取ることができるのではないだろうか。そしてこのとき重要になってくるのが、観客にどのような体験を提供することができるか、だ。

すでに日本におけるフランス映画祭は四半世紀を超え、my French Film Festivalは2010年、10回目を迎えた。my French Film Festivalでは今年、ウェブ上ばかりでなく、アンスティチュ・フランセ東京での上映も同時に行われ活況を呈した。フランス映画祭では、横浜に戻って以来、近隣大学へ映画監督・俳優たちを派遣して映画についての講義を行うマスタークラスに、より力を入れ始めている。現状を見ると同時に、潜在的な観客を掘り起こすという方策が、いま、映画祭の新たな方向となりつつあるのかもしれない。映画祭からなにが見えてくるのか、ぜひその答えを、自身の眼で確かめていただければと思う。そしてまた、さまざまある映画祭に身を浸して、主催者の思いと映画祭の多様多彩な楽しさを、ぜひ、共有してみていただきたい！

©フランス映画祭／Unifrance

©フランス映画祭／Unifrance

「音楽やるなら慶應行こう！」プロジェクト “フランスにおける第7の芸術”に触れる

藤堂　誠
（フランス映画祭事務局長／研究会 mandala musica サポーター）
TEXT: TODO, Makoto

建築、彫刻、絵画、音楽、文学、演劇、映画、メディア芸術、そして昨今MANGAを序列に入れ、フランスでは現在「芸術」を9つのカテゴリーに分けて捉えている。その第7番目にあたる「映画（フランス映画）」を世界に拡めるため、フランス文化省の非営利外郭団体であるUnifranceが横浜市、駐日フランス大使館のサポートのもと企画運営し、毎年6月に横浜でフランス映画祭を開催している。2019年そのオープニングセレモニーのステージで、慶應義塾大学ライトミュージックソサエティ（LMS）が演奏を行った。これは前年末に他界した、稀代の名作曲家／アレンジャーであるミッシェル・ルグラン並びにフランシス・レイにオマージュを捧げてのことだった。さてこのLMSの出演はどのようにして相成ったのかを記し、慶應義塾大学アート・センター構想との繋がりをご紹介しよう。

それは他でもない、憧れの塾の先輩、村井邦彦さんに端を発する。2018年11月、粂川麻里生教授（アート・センター副所長）の企画により三田キャンパスに於いて村井邦彦さんの特別講演が実施された。氏は暁星の学生であった高校時代、秀でた音楽性を見初められ、慶應LMSの客員演奏者として活躍しているうちに「そうだ、音楽やるなら慶應行こう！」と塾生への道を歩まれたとのこと。後日アート・センターのプロジェクトであるmadala musicaをサポートしようとボランティアとして塾員の仲間、角谷哲朗さん、久保泰三さんと共に検討した企画においてLMSとフランス映画祭のコラボレーションが創出された。

慶應義塾は芸術や文化に秀でた塾員を数多く輩出しているにもかかわらず、それを束ね、一つの学問として捉える窓口を持っていない。世界からの引き合いがあった場合にも適した回答を返す手筈や術がない。その窓口にならんとして発足したアート・センター構想が、将来の新しい慶應の存在価値の一つとなることと信じている。

ここで、前項出の「フランス映画祭」が横浜に根付くまでの経緯をお伝えする。ご存じのとおり日本においてのフランス映画の席巻は「ヌーベルバーグ」時代であり、当時小粋な文化人の多くはフランス映画に傾注したようだ。その流れが一段落し、ハリウッドの巨大資本による世界戦略が映画界で覇権を握る中にあっても、フランス国はカンヌ映画祭を旗艦にして、自国の映画の存在を知らしめるためのプロモーションを怠らず、世界各地での「フランス映画祭」の開催を目論んだ。折しも横浜市がみなとみらい地区の開発を手掛け、そこで行われる催事を模索しているとき、双方のニーズが合致した。海と丘を持つ港街「横浜」に南仏の陽射しと風を有する「カンヌ」を当てはめ、みなと横浜に“フランス映画祭”が着地するに至った。思い起こせば1990年初頭、旧知の先輩であったフランス生まれの洒落者、横浜三渓園の故原範行さんから故高秀秀信横浜市長を紹介され、目の前の重鎮お二方から「素敵な催事を横浜に持ってきてよ！」と背中を押された。後には当時の高秀市長にフランスの文化勲章を、そしてUnifranceの会長に横浜文化賞をと、双方の叙勲がフランス映画祭の会場で執り行われるなど、日仏の文化の架け橋の一助となったことを誇りに思う。（1999年には北野武監督の叙勲を映画祭の会場で実施したことも大切な記録のひとつだ。）

以来フランス映画祭では、日本未公開の新作フランス映画の上映と共に、総勢100名にも及ぶ出演俳優や監督などの来日代表団がそれぞれの映画上映後、観客の前に立ってQ&Aやサイン会などを介しての交流事業を続けている。また来日の映画人が大学に出向きマスタークラスやラウンドテーブルを実施するなど、スクリーン以外でも多岐に渡る国際文化交流に力を注いでいることは特筆に値すると自負している。

みなさんも6月の横浜に出かけ、フランスの誇る第7の芸術に触れてみてはいかがであろうか。

2020年のフランス映画祭は6月25日から28日を会期として横浜みなとみらい地区にて開催され、慶應義塾大学の日吉キャンパスにてのマスタークラス実施も企画している。ぜひご参加を！

UNE PASSION PARTAGE／共有された情熱（原文仏語：訳）

Unifrance 副代表　Axel Scoffier

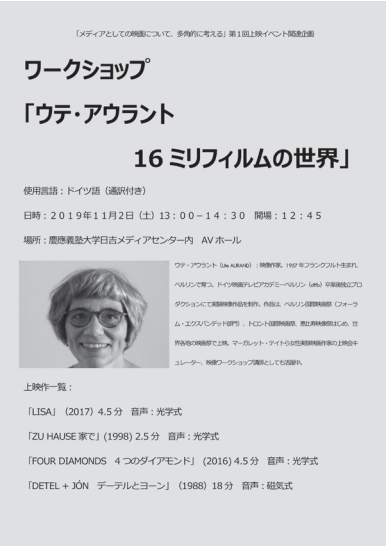
6月20日、横浜での第27回フランス映画祭のオープニングセレモニーで、慶應義塾大学のライト・ミュージック・ソサエティーは、フランス映画に対し情熱的なオマージュを称えました。

横浜市長と駐日フランス大使、フランスから来日した代表団のアーティスト、そして映画祭のミューズである中谷美紀さんらの前で、彼ら華麗なるミュージシャンは、著名なフランスの作曲家であるミシェル・ルグランの3作品を演奏しました。それはジャック・ドゥミ監督のオリジナル映画音楽（シェルブールの雨傘、ロシュフォールの恋人たち、ロバと女王）でした。

世界各国に向けてのフランス映画のプロモーションを担うユニフランスを代表し、私達に映画音楽の傑作を聞く機会を与えてくれた彼らの情熱に感謝したいと思います。2019年の初めに姿を消した彼らの作品が、優秀な若者たちの情熱によって新たに解釈されました。彼らは、フランス映画祭の代表団である俳優や映画製作者、そして最新作「男と女　人生最良の日々」を上映したクロード・ルルーシュ監督らと、映画と音楽に関する共通の情熱についての議論を交わすことができました。

この実り有るコラボレーションを大いに喜ばしく思うと共に、今後のフランス映画祭と慶應義塾大学の学生との間に起こるであろう、多くの交流の先駆けとなることを願っています。

最後に改めて、“Merci beaucoup !”



映画×教育＝映画祭？ 教養教育としての映画教育について

山口　祐子
(慶應義塾大学経済学部准教授)
TEXT: YAMAGUCHI, Yuko

私は、経済学部設置の少人数ゼミ「自由研究セミナー」で、ドイツ映画史入門を担当している。この授業は映像制作ではなく、映画の鑑賞力を磨くことを目指すもので、授業の目的は「映画を通してドイツ語圏の文化と社会に触れること」と、「視聴した映画について、自分の言葉で語れること」だ。学生には、まず地域研究(ランデスクンデ)のための教材として映画に触れつつ、最終的には「自分はどのように観たか」を言葉で伝えるために映画に取り組んでもらっている。

ドイツ語圏で撮られたドイツ語映画には、表現主義に代表される独特の心象風景があり、ドイツ語や、ドイツ語圏の移民文化の、独特な響きがある。ドイツ語圏特有の歴史を知らないと、理解が難しいものもある。東ドイツ時代の映画のいくつかにみられる批判精神を理解するためには、当時の政治や社会の状況を知る必要がある。1950年代の「郷土映画」、父親時代に対する反発から生じたニュー・ジャーマン・シネマは、西ドイツの戦後史を知ることで理解が深まる。1970年代の西ドイツで台頭した女性映画監督たちの作品は、68年世代という社会現象と不可分だ。戦中の亡命ユダヤ人だけでなく、戦後ドイツ語圏で暮らすユダヤ系の人々の映像作品は、この文化圏特有の想起の文化を担ってもいる。また「殺人者は我々の中にいる」(1946)や「ベルリン・天使の詩」(1987)「ラン・ローラ・ラン」(1998)のようなフィクションには、虚構の物語に映り込んだ記録映像としてのベルリンの来し方を観ることができる。

他方、授業は私の専門領域であるドイツ語文化圏から脱線しなければならないことも多い。ドイツ映画の歴史、というより、映画の歴史は、その黎明期から常に映画人の越境(亡命)や交流の歴史でもあるからだ。ヴァイマル共和国期のサイレント映画にはルイーズ・ブルックスなど外国人俳優が多く出演していた。1920年代のドイツではヒッチコックら名監督が修業時代を過ごし、また、国際共同制作も多く存在する。使用言語と地域を限定することが、時にドイツ映画の理解の妨げになることさえある。1920年代初頭までのエルンスト・ルビッチ、1933年までのフリッツ・ラング、1930年代のデトレフ・ジールクことダグラス・サークを、かの巨匠たちの「その後」と分断して紹介することは不可能に近い。フランスやイタリアなどヨーロッパの近隣諸国や、ハリウッドに活躍の場を求めた戦後映画人の紹介に至っては、なおさらである。そうすると、ドイツ映画について学生と話し合うときには、軸足をドイツ語(圏)というローカルな点におきつつ、同時にグローバルな、ときにグローカルな現象に目配りする姿勢が欠かせない。

さて、受講生は、最終講までに自分で映画を一つ選び、プレゼンテーションやレポートで、他の受講生に映画を「紹介」しなければならない。映画批評の真似事でもよい。しかし映像分析であれ、見どころの紹介であれ、自分以外の他者に向けて映像表現を説明させることは、学生たちにとって言葉を映像化することと同じくらい大変で、骨が折れる。少人数ゼミは少人数であるからこそ、学生と教員が打ち解けて話し合えるのだが、ときにお互いあまり言葉を尽くさなくても分かりあえ(た気になっ)てしまう。一人だけではなく、少人数の仲間うちだけでもなく、様々な人々が集う公共の場で、学生が映画について語ることを通して「伝わる言葉にする力」を育てる、一種の教養教育のような場が必要なのではないか。近頃そんなことを考え、日吉で学生参加型の映画上映イベントを企画したりしている。[注)]

インターネット配信で、スマホや自宅のテレビ画面で視聴する「動画」がメディアとしての映画の主流となりつつある今、大学という高等教育機関が、敢えてスクリーンに投影する「映画」を、不特定多数の観客たちと共に体験できる場を提供することは、学生にとって、映画鑑賞の仕方を広げることでもある。日吉キャンパスに通う学生は、留学生や通信教育課程の学生がいるとはいえ、その多くが二十歳前後の若者である。彼らが、大学で開催される映画上映会のような場で、教室では出会わない年代の方や、文化的社会的背景の異なる地域の方と共に映画を観賞し、ただ映画を観るだけでなく、その映画について語ることで、お互いに全く気が付かなかった映画の見方を発見できれば、それは「映画教育」と言えるのではないだろうか。それに、映画教育は映画研究者のためだけにあるのではない。膨大な他の作品群と比べながら鑑賞するだけでなく、文学作品についてよく行われるように、一つの映画について、例えば音楽家や歴史家、心理学者や医学者、そして映画製作の当事者たちが一堂に集まって、それぞれの専門家の立場から全く異なる見方を論じたってよい。むしろ映画を多角的な視点で読み直すことこそ、映画という間メディア性を前提としたメディアに必要なリテラシーであろう。

地域の住民と学生が映画に触れる場は、小規模映画祭や自主上映会などの形で、おそらく各地に無数に存在する。監督や映画人が上映会に参加する場も増えている。しかし、様々な分野の専門家を擁する総合大学のような場所、とりわけ、日吉のような教養課程と、とりわけ相性がよいのではないかとおもう。映画ファンの映画ファンによる映画ファンの集まりも、もちろん心地よく、楽しい。そして大学が教育機関である以上、専門家のレクチャー付き上映会も、大いに意義がある。加えて、大学が自由闊達な議論を確保する場であるという点に鑑みたとき、映画をきっかけに異論や反論を引き出し、学生に様々なものの見方に触れるよう促すことも、映画祭を通じた映画教育の一環となるのではないかと考えている。雑多な鑑賞者が集う場は、映画のような異種混交のメディアに、そして大学の教養課程のような異種混交の公共空間に、ふさわしいのではないだろうか。

注)「老いを生きる—映画がとらえた老いのかたち」2019年11月2日〜3日、メディアセンター地下AVホール及び日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにて開催。主催:「メディアとしての映画について、多角的に考える」実行委員会、協力:日吉ドイツ語部会。

図版左:イベント告知ポスター(デザイン:森田尚恵)
図版右:ワークショップ紹介ポスター(筆者作成)

活躍する先輩
『バスケから囃子方へ』

中島　一樹
（邦楽囃子方）
TEXT: NAKAJIMA, Ikki

○はじめに

2019年4月21日慶應義塾三田キャンパスにて、「慶應義塾から芽吹く伝統芸能の未来」と題した演奏会を開かせていただきました。

この演奏会は、江戸時代から受け継がれている長唄を、慶應義塾の教職員や塾生、塾員に広く知っていただきたいと考え、企画したものです。粂川麻里生先生（文学部教授・アート・センター副所長）と中谷彩一郎先生（文学部准教授）のご協力のもと、約150名のお客様にご来場いただき、無事終えることができました。

私は、「長唄」というジャンルの音楽をしております。長唄の演奏者にはそれぞれ呼び名があり、唄を唄う人は「唄方」、三味線を演奏する人は「三味線方」、そして打楽器と笛を演奏する人を「囃子方」と呼びます。（打楽器と笛はそれぞれが専任）

私は現在、「囃子方」として長唄の演奏会や舞踊会に出させていただき、研鑽に励んでおります。

この文章は、私が就職活動を経て、囃子方として活動するまでの人生を、当時の心境を交えながら自由に書かせていただいたものです。拙い文章では御座いますが最後までお付き合いいただけましたら嬉しく思います。

○就職活動によって芽生えたもの

大学3年生の終わりから就職活動が始まり、自分の将来を真剣に考えるようになりました。今までは目の前のこと（特にバスケットボール）を一生懸命にやっていて、それに自分の人生がくっついてきたような感覚で、将来のことは深く考えたことはありませんでした。

自己分析などで自分自身を深掘りするのですが、それをすればするほど自分というものがわからなくなるもので、「本当にやりたいこと」を突き詰めるのに私はかなりの時間と精神を使いました。

周囲の人は早くから就職先を定め、OB訪問や面接対策などに取り組んでいましたが、私の場合は気持ちの整理が出来ず、気付くと就活が本格化していたような感覚でした。

正直な話、それまで将来を考えていなかった人が就活の時期になって本当にやりたいことが見つかるかといったらなかなか難しいのではないかと思います。私には無理でした。かと言って、就職しないという選択肢も考えづらく、私はとりあえず世間的に「良い」と言われている企業に軒並みエントリーしました。

とある企業の面接で「本当にここで働きたいですか？」という質問に対して、嘘でも「はい！」と言えば良いものを「……正直そう思っていません。」と答えてしまうほど自分で納得ができないまま就職をする覚悟が出来ていませんでした。

自問自答を繰り返す日々の中で私は、「自分のやりたいことは何なのか？」を突き詰めるのではなく「どういう人間になりたいか」もっと極端なことを言ってしまうと「どういう風に死にたいか」を考えるようになりました。そうすることで自分の本心がなんとなく見えてきました。どうせ死ぬなら一回の人生、自分の心に正直に動いてみようと思いました（かなり偏った考え方ですが……）。

そしてこれは本当に今となっては恥ずかしいのですが、「自分には特別な才能がある」という深層心理が当時の自分にはあったようで、「そんな自分を媒体として自身を表現したい！」「それを多くの人から承認されたい！」という欲求が自分の中にあることに気が付きました。 そして、就職という方法では自分のなりたい自分になれないと感じ、私は自分を表現する手段として「音楽」を選びました。中でも当時は「歌手」として自分を発信したいと強く思っていました。

周りからは「突然どうした？」とかなり心配されたり、反対をされましたが、そう思ってしまったらもうその気になってしまうもので、この気持ちを押し殺して就職は出来ませんでした。40歳くらいになってから自分の何かが爆発してしまいそうな気がして、それからではもう遅いだろうと思いました。その選択は非常にリスキーで、今思い返せば物凄い選択をしたと思います。しかし、当時の自分は「根拠のない自信」に満ち溢れており、自分は成功すると信じ込んでいました。

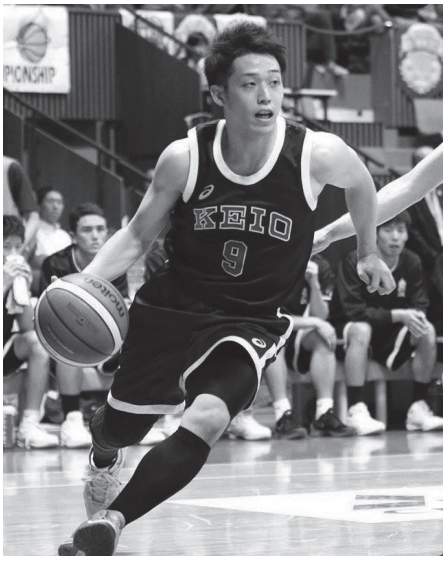
両親に相談をした時に、さすがにそうすんなりと認めてはもらえませんでした。母はストレスで大きな10円ハゲが出来てしまい……申し訳なさを感じましたが、最終的には私が本気で言っているのなら応援すると言ってくれました。ただ「卒業後3年間は好きにしていいが、それで何もなかったら一般企業に就職をする」という約束でした。

高校進学や大学進学など、人生の分岐点において、今まで周りからの意見を大事にしてきましたが、自分の進路を多くの人の反対を押し切ってまで自分自身で選択したのは初めての事でした。

とは言うものの、そう上手くは行かないのが現実でした。ボイストレーニングに通ったり、ギターを練習して曲を作ったり、オーディションを受けたり……。また、自己を表現する方法として、演技のワークショップに行ってみたり、エッセイを書いてみたり……とにかくもがき苦しみました。

気が付けば大学を卒業し、周りが新たな道へ一歩を踏み出す中、自分は世間から孤立し、宙にぽつんと浮いている様な感覚を味わいました。

正直、その頃の自分はだいぶ病んでいました。鏡



バスケに打ち込んでいた頃の筆者

長唄に出会って

名取式にて。藤舎呂船先生、藤舎呂英先生とともに

の中の自分に「お前ならできる！お前なら出来る！」と訴えかけたり、ベッドの上で目を瞑って、大きな舞台で輝いている自分を想像したりすることで何とか精神を保っていました。

○長唄との出会い

そんな日々の中で、慶應義塾のバスケット部のOBの方に邦楽に通じている方がおり、「邦楽をやってみないか」という内容のメールを頂きました。私は、邦楽＝J-popだと思っていたので、『あの、邦楽ってJ-popのことですか？』という、今考えたら馬鹿な質問をしてしまうくらい縁の無いものでした。これが私の邦楽とのはじめの接点です。

そして、興味本位で初めて歌舞伎を観に行ったり、長唄の演奏会というものを鑑賞しました。物凄くかっこよかったですし、舞台の張り詰めた空気感にドキドキしました。自分にはその世界が、音楽的でもあり、芸術的でもあり、職人的でもあり、大変感銘を受けました。こんな世界があったのだと驚き、こういう方法で自分を表現することも出来るんだと新たな気付きを得ました。

その中でも私は囃子に興味を抱き、直感的にその時の自分は囃子がやりたいと感じました。今の師匠である藤舎呂英先生の演奏する姿にひどく感銘を受けたことが大きいです。

それから、お試しでお稽古をさせていただき、本格的に弟子入りをさせていただくことになりました。そして、まず東京藝術大学を受験することとなります。

○藝大受験

当時の私は喫茶店に住み込みで働いていました。その喫茶店のオーナーに藝大受験の話をしたところ、閉店後のフロアで好きなだけ練習をしていいと言っていただきました。

受験までの半年間は、以下の様なほぼ引きこもりの生活をしていました。

6時半～ 10時　バイト
11時～ 16時　睡眠
17時～ 23時　バイトorお稽古
23時～ 3時　練習
3時半～ 6時　睡眠

また、人と会うのも避けていました。

バスケ部の一つ下の学年の後輩も次々と就職先が決まり、「自分は何をやっているんだ……」とメンタルをやられる時期もありました。「みんなどうせおれのことを哀れんでるんだ」と卑屈になったり、キラキラしている人を見るのが辛くてSNSを辞めたり、自分が今何をやっているかということも人にはあまり話さない様にしていました。周りからの刺激で心が乱れたくなかったからです。

形として、結果として、みんなに報告したい。絶対にやめておけと反対した人、哀れんでいた人を見返したい。それが藝大に合格することの一つのモチベーションにもなっていました。

師匠、姉弟子、喫茶店のオーナーなどたくさんの人に支えていただき、藝大受験に向けて順調な日々を送らせていただいた結果、無事合格することが出来ました。

やっと、新しい人生のスタートラインに立つことができました。中島一樹という存在に対しての自信を失っていましたが、自分はまだまだやれるぞと、自信を取り戻せる大きなきっかけとなりました。

○藤舎英心として

そして、紆余曲折を経て藝大を卒業し、令和元年6月より囃子の流派である藤舎流の一員として、「藤舎英心（とうしゃえいしん）」という名を許され、プロとしてのキャリアをスタートさせました。

両親と約束した3年間で自分の人生はこんなにも大きな変化がありました。自分の心からやりたいと思えることに出会い、今その道を歩めていることを本当に幸せに思いますし、人生って不思議だなぁと今でも感じます。また、この期間で味わった苦悩や挫折の日々は、これからどんなことがあっても、それを乗り越えてきた自信が自分を奮い立たせてくれると信じています。この期間を与えてくれた両親には感謝しております。

○最後に

最後になりますが、「夢を追うこと」が、難しくなっている世の中です。特に慶應義塾のように 高学歴であればあるほど、周りからの期待や、空気感から、俗に言う「エリート街道」を一旦外れるには大きな勇気とリスクが伴います。しかし、本当にやりたいことがあったり、なりたい自分がいる人にとって、その未来へ向かう為の人生の冒険であれば、私はそれを踏み出すことに大きな価値があると思っています。

今回、この文章を通じて自分のユニークな人生を知ってもらうことで、本当に些細なことでもいいので、「誰かの何か」に影響を及ぼすことが出来るのであれば、こんなに嬉しいことはありません。

自分自身、まだ何かを成し遂げたわけでは無いので、偉そうなことは言えません。

これからの人生、自分のなりたい自分になれるよう、一歩一歩前に進んでいけたらと思っております。

ありがとうございました。

活動報告

■催事

夜のアーカイブ、芸術のドライブ　2019年5月12日(日)　六本木区民協働スペース1・2
「六本木アートナイト2019」は、アート・センターの「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトと共同し、『アートナイトを語る―My Night Cruising』を履修学生向けに実施しており、本トークセッションは、学生向けワークショップの取組の一環で、一般の方も参加できるイベントして行われた。現代アートアーカイブとは何か? といった基礎的なイントロダクションを踏まえ、六本木アートナイトのような芸術祭におけるアーカイヴの諸問題を検討し、また、場所や歴史の丁寧なリサーチから、新たな作品を生み出しているアーティストの田村友一郎氏を交えて、作品制作とアーカイヴとの関連性を捉え直しながら、現代アートのアーカイヴについて当センター所員の久保仁志と広く語り合った。

新入生歓迎行事　上杉満代舞踏公演「命」　2019年5月24日(金)　日吉キャンパス　来往舎イベントテラス
慶應義塾大学2019年新入生歓迎行事として、上杉満代舞踏公演「命」を行った。今回の公演において、上杉氏が舞踏家・大野一雄の「舞踏とは、生活ですよ!」という言葉を強調し、まさに自身で繰り返し語っているように、舞踏とは「人間という動物の持つ現本能のすべてを精神でひっぱりあげ、それを踊りの形にする喜びと難儀」であることを舞踏によって表現していた。また、自然植物やシンバルを使った多田正美氏の音楽はインパクトがあったが、上杉氏の舞踏はそれに拮抗し、見事な緊張関係を作っていた。この数年の中で、最も印象的な公演のひとつである。

港画:都市と文化のビデオノート　2019年5月26日(日)　三田キャンパス　北館ホール
「都市のカルチュラル・ナラティヴ」は、港区という都市に息づく文化を多様な視点から物語り、つないでゆくプロジェクトである。2018年度は、テキスト・写真そしてビデオなどの多様なメディアによって、数名のドキュメンタリー映画監督(阿部理沙氏、藤川史人氏、大川景子氏)とともに、都市文化の物語を映像で捉えようと試みた。その活動報告として、各監督が、飛び込んで出会った物語をかき留めたビデオノートの上映会を行った。上映後は、映画監督の新部貴弘氏もゲストに加え、当センターで美術理論・アーカイヴ理論・映画の研究を行う所員の久保仁志をディスカッサントに、監督たちとポスト・トークを行った。

令和元年度港区文化プログラム連携事業　都市のカルチュラル・ナラティヴ:カルナラ・コレッジ
「地域文化資源再発見ワークショップ」を2019年度のテーマとし、文化財の活用、情報探索などを専門とする講師とともに、地域文化資源を再発見し、その多様な価値を共有してゆく方法を学ぶ、全4回のワークショップを港区に関係のある一般参加者向けに開催。8月23日(金)「#1:物語の軸を作る」では、自分の関心軸を見つけるためのグループワークを行い、地域文化資源について調査するための情報源を共有した。残る2回(10月11日(金)、11月29日(金))で物語を構成し、最終日の2020年1月24日(金)プレゼンテーションを行う予定である。

Seiko presents「油井正一アーカイヴ　拡張するジャズ　研究会」
本年度も株式会社セイコーホールディングスの協賛を得て、公開研究会やレクチャーコンサートを無料で開催している。レギュラー講師の中川ヨウ氏(洗足学園音楽大学)と毎回著名なゲストをお招きし、北館ホールや東館6F G-Labなど大きな会場でほぼ満席という大きな反響を得ている。今年度上半期に開催した研究会の各テーマは以下の通り。
①4月22日(月)「エスペランサ・スポルディング考察」
②5月22日(水)「菊地成孔、菊地成孔を語る」
③8月8日(木)「生誕120年:デューク・エリントンを再考する」
④9月26日(木)「ビッグバンドの歴史〜トミー・ドーシーからマリア・シュナイダーまで〜」

UMAC東京セミナー　文化コモンズとしての大学ミュージアム　2019年9月9日(月)・10日(火)　三田キャンパス　北館ホール、東館G-Lab、東館8階ホール
UMACは大学ミュージアムとコレクションの最も大きな国際的フォーラムである。東京初のUMACコンファレンスとなるUMAC東京セミナーは、博物館相当施設であるアート・センターと、塾内のコレクションや展示活動を繋ぐ役割を担うミュージアム・コモンズが共同で企画し、「異なる文化に根差した知識や人々の交流をうみだす大学ミュージアムの力」をテーマとした。14の国と地域から大学博物館関係者が参加。また、学芸員博物館学課程で学ぶ塾生約60名も参加し、多様な文化的背景をもつ参加者と交流する貴重な機会となった。基調講演では様々な専門領域を持つ研究者が領域横断的な議論を展開し、その後開催されたガイドツアーでは都内の大学博物館、文化施設を訪れ、好評を博した。

■アート・スペース展示

スタンディング・ポイントII　「アナ・メンディエタ」　2019年3月25日(月)−5月24日(金)
アート・センターでは、若い世代が学ぶ大学という場でこそ同時代を生きるアーティストたちの作品と出会う機会を作りたいと考え、2011年度から5年にわたり「同時代の眼」シリーズを開催してきたが、それに引き続く新たな現代美術の展示シリーズとして「スタンディング・ポイント」シリーズを昨年度より開始した。展示は9点の写真作品で構成された。今回展示した作品はメンディエタの典型的な作品群であり、そこには自らの身体を媒介として展開する彼女の作品の多様性もまた見出すことができる。彼女自身が土をまとって樹と同化するイメージや、ささやかに枝の花を用いて人型を示唆する作品、水辺の窪地と藻が人の姿を出現させるもの、自分の人型を大地にスタンプした写真、古い教会の壁龕に小枝で人型を作り上げた例、などバラエティに富んだ作品群となった。そして、どの写真にも、メンディエタの強烈な存在感を感じることができる。また、1970年代の作品でありながら、1970年代の時代性よりも、今日的な問題提起を強く感じる作品であると言ってよい。この点は、来館した学生の反応や感想からも実感できる点であった。

『プリーツ・マシーン』2:中嶋興×松澤宥―写真上の部屋　2019年3月25日(月)−5月24日(金)
1969年、中嶋興は松澤宥の「ψ[プサイ]の部屋」へ赴き、写真撮影を行った。「ψの部屋」は松澤が制作していたアトリエであるとともに、それ自体も作品として考え得る部屋である。完成と未完成が混淆した制作物の群れで埋め尽くされているこの部屋で行われたのは、単なる撮影ではない。松澤とこの部屋へと向けられた2日間に渡る中嶋の執拗な関心はパフォーマンスへと生成し、その記録写真として結実している。およそ1,500枚に及ぶこの写真群は、松澤と一つの部屋へと差し向けられた1,500のパースペクティヴであるとともに、中嶋と松澤と「ψの部屋」によるパフォーマンスというひとつの出来事の諸断片である。アーカイヴはいかにこの出来事と膨大な写真群を思考[モンタージュ]できるのだろうか。印刷物と展示(動画・写真)を通じてこの問いを考えた。

2019年度センチュリー文化財団寄託品展覧会・特殊文庫連携展示　本の虫・本の鬼　2019年6月3日(月)−6月28日(金)
今年度は大東急記念文庫・東洋文庫・静嘉堂文庫・金沢文庫および斯道文庫の5文庫が連携して書物に関する展示を行う「五文庫連携展示　特殊文庫の古典籍」に参加するため、開催時期を例年の11月前後から6月へと移動させた。
新しい試みとしては、本展のテーマをより明確にするため、所蔵者の略伝をその蔵書印とともにパネルにして、両会場の旧蔵書の近くに掲示し、観覧者の理解を助けたこと、またLINEの機能を利用して、観覧者のスマートフォンに展示品の番号等を入力すると、その解説や画像がダウンロードされるという試みを行った(制作:アドグローブ)。いずれも好評だった。
展覧会のテーマは、「本の虫・本の鬼」とした。書物そのものの価値・魅力だけでなく、それを所有し、また研究した蔵書家・学者たちの営みについて、書物を通じて考える、という形で、慶應義塾が所蔵する書物を多面的に紹介するというのがその狙いであり、ほぼ達成されたと考える。

■アート・スペース展示　今後の開催予定
アート・アーカイヴ資料展 XIX　中嶋興　―マイ・ライフ―　2019年9月9日(月)−11月1日(金)
「彼方の男、儚い資料体」　2019年11月11日(月)−11月22日(金)
アート・アーカイヴ資料展XX:影どもの住む部屋II―瀧口修造の〈本〉―「秘メラレタ音ノアル」ひとつのオブジェ　2020年1月20日(月)−2月21日(金)

ARTLET　第52号
発行日:2019年9月30日
編集:内藤正人
　　桑川麻里生
　　後藤文子
　　渡部葉子
　　小菅隼人
　　徳永聡子
　　加賀斉天
制作:印象社
発行:慶應義塾大学アート・センター
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45
TEL:03-5427-1621(直通)
FAX:03-5427-1620
http://www.art-c.keio.ac.jp/
E-mail:ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2019
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンター HPをご覧ください。

慶應義塾大学
アート・センター
KEIO UNIVERSITY ART CENTER